

「大河」第2号

令和7年9月16日

「わかる」ということ

「あなたの気持ちはよくわかるよ…」「いつものあなたらしくないね…」「あなたのことは私が理解しているから大丈夫だよ…」こんな言葉かけを子どもにしたことはないでしょうか？

私自身、かつて場面や状況によっては、こうした言葉がまったく相手の心に届かず、無力感を感じたことがしばしばありました。

さて、こんな問いについて、時々考えてみる必要があります。

それは、教師としての経験やスキルを積み重ねていけば、子どもの心が「わかる」ようになるだろうか？という問いです。私はその答えはYESでありNOでもあると思います。

一見矛盾しているようですが、子どもの心が「わかる」ようになるためには、子どもの心が「わからない」と気付くことがまずは大切なのではないかと考えています。つまりこの問いは、教師としての経験やスキルとは異なる次元で語られるべき問いなのではないでしょうか。

以前、哲学者の池田晶子氏が、著書の中でこんなことを書かれていました。

『患者は、医者にはわからない考えや感覚や感情をもっている。自分にはわからないそれらについて、「なぜこの人はこんな風に考えるのか」「なぜこの人はこう感じざるを得ないのか」それをわかってあげようとするのが医者の仕事なのだ…(後略)』

子どもと教師の関係についても、これと同じことがいえるのではないかと思います。

しかし、このとき教師がいつも「自分がわかっているわかり方」によってのみ、子どものことをわかってしようとするならば、やがて子どもは教師に対して心を閉ざしてしまうかもしれません。

言い換えれば、そこに子どもと教師の＜対話＞が成立することはないのでしょう。

池田氏は、さらに『わからないものをわかることができるのは、実は「わかって」いう不断の意思でしかない…』とも言っています。それは私なりに解釈すれば、共感であり、思いやりであり、優しさに他ならないと思います。

今の社会の中で私たちに求められているのは、相手のことをわかってしようとする意志だと思います。そう考えると、子どもたちが一日の中で最も多くの時間を過ごす舞台である学校や教師の役割や責任は極めて重いものだといえるでしょう。「わからない」ということが「わかる」からこそ、人はそれを何とか知ろうと努力する、その営みこそが学びの意味だと考えています。